

第164回簿記検定試験

1級 出題の意図

[商業簿記]

(出題の意図)

今回の商業簿記では、決算整理前試算表から損益計算書と貸借対照表（主要項目のみ）を作成する総合問題を出題しました。

基本的には、必要な決算整理仕訳（未処理事項に関する仕訳を含む）を行うことができれば、解答できる形式です。収益認識に関する論点は、最も重要な論点の一つとして繰り返し出題しています。今回は、典型的な返品権付販売、インプット法に基づく収益認識、受注損失引当金などを取り上げて出題しています。現在の収益認識会計基準では、将来の見積りに基づいた会計処理が取り入れられていますが、事後的な修正も不可避免に表示しますので、最終的な顛末まで含めて理解しておくことが必要です。

有形固定資産および無形固定資産の減価償却は、個々の処理は難しくないと思いますが、時間的な制約の中で正確に処理することは必ずしも容易ではなかったと思います。確実かつ丁寧に処理していくことを心がけてください。

[会計学]

(出題の意図)

第1問では、用語の意味や会計処理方法の理解を問うことで、会計学の理論や制度を理解していく上で必要となる基礎的知識が備わっているかを確認する設問です。難易度はそれほど高くありませんが、いずれの設問も単純な暗記に頼ったのでは正確な解答を導き出すことが容易ではなく、それぞれの処理が要求される根拠にまで遡って理解しておく必要のあるものに限定して出題しました。

第2問では、連結財務諸表と包括利益計算書の作成プロセスを通じて、連結会計や包括利益の本質的理解を問う問題を出題しました。従来と出題のスタイルが若干異なるので戸惑った受験者もいたかもしれません。また、包括利益の論点も絡むので、やや計算力が必要であったり、難易度の高い設問もありました。ただ、複数の企業が一つの会計単位になるということの意味が理解されていれば、比較的簡単に解答を導き出すことのできる設問も織り交ぜてあります。やみくもに連結の処理を進めるのではなく、まずは全体像を見渡して設問で問われているエッセンスを掴んでから、解答の戦略を立てて解答に取り組むことが結局は近道になります。

[工業簿記]

(出題の意図)

第1問は、工業簿記における実績把握に係る基本事項でありながら、ともすると盲点

になりがちな部分の出題です。原価計算でよくでてくる原価計算票や材料カードがどういう補助簿となるのかといった関係をきちんと把握しておく必要があります。「原価計算基準」では実際消費量の計算との関係で継続記録法と、棚卸計算法があげられています。実際消費量の把握との関係で継続記録法と棚卸計算法を理解する必要があります。またわが国の実務として段取時間が直接作業時間になり、直接労務費になるということも知っていてほしいことです。米国では段取工がいて段取費が製造間接費になるのが一般的です。ABC が例として段取費をあげて配賦方法の改良を説明される場合が多いですが、もともと直接費として処理しているわが国ではその説明はあてはまりません。

第 2 問は全部原価計算と直接原価計算の利益の差がなぜ生じるかを理解してもらう設問でした。棚卸資産の金額、売上原価の金額、利益の金額の相互関係性を問うという趣旨で工業簿記の問題として出題しました。固定費調整の公式にたよって最終的な計算結果を計算できればよいとするのではなく、その理由を理解してほしいと思います。そのしくみを説明する文章を完成させる問題で、正答を誘導する形になっているので、理解が不十分だったひともこの問題をきっかけに知識を整理して理解を深めてもらえればいいと思います。

[原価計算]

(出題の意図)

第 1 問は、戦略の策定と遂行のための原価計算からの出題です。①～③では品質原価計算の理解度を問うています。品質保証活動費ないし製品品質保証費とは具体的にどのようなものか。予防原価、評価減か、内部失敗原価および外部失敗原価にはどのような原価要素が含まれるかを理解しましょう。ライフサイクル・コストは、製品やシステムなどの核開発から廃棄処分されるまでの生涯にわたって発生するコストです。研究開発、生産・構築、運用・支援、廃棄などの各段階でどのような原価が発生するのか、それらの関係はどうなっているかなどについて理解しましょう。

第 2 問は、総合原価計算からの出題です。問 1～問 2 では、正常仕損費および異常仕損費の計算と処理の理解度を中心に問いました。問 3 ではこれに加えて、総合原価計算における典型的な論点として、完成品と月末仕掛品への原価の配分として先入先出法の理解を問うています。異常仕損費の処理がわからない受験生には難しい問でした。問 4 は製品の払出単価として平均法の理解を問いました。問 3 ができていないと解答が難しい問でした。